

詠む広場

毎日俳壇

小川 軽舟 選

鳴や鎮守の森の朝じめり

さいたま市 池田 雅夫

△評▽雨上がりだろつか、さえずりの響く森がしっとり湿っている。空気の匂いまでするような臨場感のある句だ。

花散るや大川端に舳船

東大阪市 三村まさる

△評▽隅田川にのめた船に花が散る。作者が感想を言わなくても、惜春の情があふれている。少年の放ちし鳩や春の空

直方市 岩野 伸子

春寒し仏壇の火の親しげに

我孫子市 矢澤 準二

鳴や小学校は日曜日

小林市 黒木 暢

口笛を吹きたき日なり春の雲

北九州市 土居 康二

足踏みのミシン軽やか春障子

福岡 手島喜美江

春光の少年野球河川敷

東京 野上 卓

さつきも遅延こつちも遅延花天

狭山市 小俣 友里

クレヨンの匂ふ三色堇かな

大和高田市 楠 伸治

西村 和子 選

バスの客二人となりし春の暮

秦野市 安藤 泰彦

△評▽ふと気づくと乗客は自分ひとり。春の夕暮れの倦怠感とともに、春の終わりのそこはかこない寂しさも漂ってくる。

桜しべ降りしソーの暮れ残る

下野市 石井 光

△評▽桜が散りつくした後のにぎわいの去った公園。置いてけぼりのソーがこの句の焦点。あらためて家の近くの桜見に

河内長野市 滝尻 芳博

帰りたくない人ばかり花の下

東京 福島 隆史

欲深な自分に気づく潮干狩

狭山市 小俣 友里

花の雨上がりて闇の柔らかき

伊勢市 藤井 信弘

薄暗き古書店出て若葉光

和歌山市 溝口 圭子

カーテンがふわり膨らむ春の午後

岸和田市 板原 克介

風光のキリン模様の園児バス

東京 石川 昇

春の雲数へてあたる昼深し

直方市 岩野 伸子

井上 康明 選

風光るどこもかしこも子供たち

奈良市 浦城 亮祐

△評▽4月の小学校を想像した。まはゆく風の光る日、どの教室もこどもたちは活気に満ちて、教室からあふれ出そうだ。

夏空の色を探しに画材店

長崎市 鶴田 鴻己

△評▽その青は、かけがえのない、鮮やかな色なのだろう。画材店のさまざまな絵の具が浮かぶ。句心の広がり行く桜かな

唐津市 梶山 守

ほろ苦き独活の匂なり山の雨

東京 徳原 伸吉

句集より切り絵の葉みどりの日

甲斐市 松田 健嗣

あひつちのけんもほろろや目借時

札幌市 岡崎 実

花見鯛うろこの二つ頬に飛ぶ

仙台市 引地 恵一

鳥交るごうごうと挽く珈琲豆

加古川市 石村 まい

象の背に釈迦牟尼の立つ花御堂

奈良市 奥 良彦

ごつごつの冬木ごつごつの私

町田市 岡 良

片山由美子 選

花冷や屋敷に残る刀疵

つくば市 村越 陽一

△評▽幕末の歴史の舞台となった京都の寺田屋あたりか。桜の季節ながら、リアルな傷痕を見た感慨が季語にこめられている。

雨垂れを聞きつつ春を惜しみけり

神戸市 末永 拓男

△評▽雨垂れを耳にしながらもの思いにふける姿は、「春惜しむ」というより「春愁」のおもむき。山辺の道を染めたる落椿

和歌山 神野 一馬

橋いくつ潜り抜けたる花見舟

鹿児島市 平川 玲子

花吹雪三番線に着く列車

長崎市 田中 正和

廃校に残る花壇や別れ霜

光市 岩崎 滋

草餅や亡き人のこと語り合ひ

北九州市 篠原 敬祐

種袋心もとなき軽さかな

松山市 井上 保子

妹にやさしき兄や桃の花

東京 山口 照男

たんぼぼの広場は蝶の通り道

川口市 高橋さだ子

うたは奏でる

子どもの歌

染野太朗

「子どもの日」にちなんで、今回は子どもたちが登場する歌を読んでみたい。ゆふぐれに足をひらいて立つてゐる七歳と五歳 私の子孫よ 池田はるみ

・叱られて涙出づるはなにゆゑといひなきは問ふ優しかれよ科学 島田修三

・大海に子供を釣りぬこの子供われが育てん楽しく育てん 花山園子

(そのめ・たろう「歌人」)